

菊池寛記念館文芸講座 『源氏物語』の魅力―紫の上の物語を中心に―

※各本文末「」内の数字は、引用した『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）の巻号と頁数を示す。

○紫の上との出会い（若紫巻）

―光源氏は、ある春の日、病気の療養のため都の外れにある北山を訪ねた。そこで、ある僧都（僧侶の位階）の家に女が住んでいることに気付いた光源氏は興味を抱き、かいま見をしたところ、一人の少女に目を惹きつけられる。

【本文①】

日のいと長きにつれづれなれば、（光源氏は）夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの（＝僧都の家の）小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣（＝従者とのぞきたまへば……きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひるげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。……（紫の上）「雀の子」
1

を犬君（＝召使の少女が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。……尼君（＝紫の上の祖母）、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日とおぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて、（尼君）「こちや」と言へば（紫の上は）ついゐるたり（＝膝をついて座った）。……ねびゆかむさまゆかしき人かな、と（光源氏は）目とまじりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人によう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。
【二〇五〜二〇七】

○紫の上の境遇（若紫卷）

—その後、光源氏が北山を訪れていることを知った僧都（かいま見した家の主）は、光源氏を自宅に招く。かいま見た紫の上の姿が忘れられない光源氏は、遠回しに僧都にその子の素性を尋ねた。ここで紫の上の不遇な境遇が明らかにされる。

【本文②】

（紫の上の）昼の面影心おもかげにかかりて恋しければ、（光源氏）「ここにもものしたまふは誰たれにか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえたまへば、（僧都は）うち笑ひて、「……故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、え知ろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹いもうと（＝本文①の尼君）にはべる。……（その間には）娘ただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、（その娘を）内裏うちに奉らむなどかしたてまつこういつきはべりしを、その本意ほんいのごとくものしはべらで過ぎはべりにしかば（＝亡くなりましたので）、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮ひやうぶけいのみやなむ忍びて語らひつきたまへりけるを（＝通うようになったのですが）、（兵部卿宮の）もとの北の方やむごとなくなどして、（娘は）安やすからぬこと多くて（＝正妻北の方からの威圧を暗示）、明け暮れあものを思ひてなむ亡くなりはべりにし。もの思ひに病やまひづくものと目に近く見たまへし」など申したまふ。

〔一〕二二二〜二二三

○紫の上の引き取りと養育（若紫卷〜紅葉賀卷）

—尼君が死去し、紫の上が父兵部卿宮と継母に引き取られることが決まると、光源氏は紫の上を強引に連れ出し、ひそかに自邸二条院に迎える。光源氏は理想の女性、藤壺の面影を求めて幼い紫の上を養育し、紫の上も徐々に光源氏に馴染んでいく。

○光源氏の正妻へ（葵卷〜藤裏葉卷）

—正妻であった葵の上が死去した後は、紫の上がその座に据えられることになる。その後は明石の君や朝顔の女君など光源氏の他の女性関係に悩むこともあったが、光源氏の第一の妻としての地位が揺らぐことはなかった。光源氏が准太上天皇という最高の位に就くと、紫の上もその第一夫人にふさわしい待遇を受ける。

○紫の上の苦悩の始まり（若菜上巻）

―光源氏四十歳の年、朱雀院の娘であり、紫の上と同じく藤壺と血縁を持つ女三の宮を妻として迎えたことで、紫の上は、晩年になって第一の妻の座を失うことになった。

【本文③】

（結婚後）二日がほどは、（光源氏は女三の宮に）夜離れなく渡りたまふを、（紫の上は）年ごろさもならひたまはぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。（紫の上は）御衣ども（光源氏が着て行く装束）など、いよいよたきしめさせたまふものから、うちながめてものしたまふ気色、いみじくらうたげにをかし。（光源氏心中）「などで、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ（他に妻を迎えるべきではなかったという後悔）……」と我ながらつらく思いつづけられるに、涙ぐまれて、（光源氏）「（結婚三日目の）今宵ばかりはことわりとゆるしたまひてむな……」と思ひ乱れたまへる御心の中苦しげなり。……（紫の上は）硯を引き寄せて、

目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな

古言（古歌）など書きまぜたまふを、（光源氏は）取りて見たまひて、はかなき言なれど、げに、
とことわりにて（紫の上がそう思うのも当然だと思つて）、
3

命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬなかの契りを

とみにもえ渡りたまはぬを、（紫の上）「いとかたはらいたきわざかな（自分が光源氏を引き留めたと女三の宮側に思われる心配）」とそそのかしきこえたまへば、（光源氏は）なよやかにをかしきほどにえならず匂ひて渡りたまふを、（紫の上は）見出だしたまふもいとただにはあらずかし。

（紫の上心中）年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも（光源氏が他の女性を妻に迎えるのではない）かという不安もあったが、今はとのみもて離れたまひつつ（光源氏も今は恋愛から遠のいていて）、さらばかくにこそは（このままでいられるのだらう）と、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、
今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。

○紫の上の苦悩の深化（若菜下巻）

―女三の宮との結婚から数年の歳月が経ち、兄弟の今上帝の即位などにより、女三の宮の社会的地位はまさっていく一方であった。それに対して紫の上は、女三の宮や幸せな物語の主人公と比較して我が身の不安定さを改めて実感していく。

【本文④】

対の上（紫の上）、かく年月（七しつき）に添（かたがた）へて方々にまさりたまふ（女三の宮の）御おぼえに、わが身はただ一（ひと）ところ（光源氏）の御もてなしに人には劣らねど、あまり年積もりなば、その御心ばへもつひに衰へなむ、さらむ世を見はてぬさきに心と背（そむ）きにしがな、とたゆみなく思（おぼ）しわたれど、さかしきやうにや思（おぼ）さむとつつまれて（生気だと思われぬかと遠慮されて）、はかばかしくもえ聞こえたまはず。

〔若菜下巻四一七七〕

【本文⑤】

対（紫の上）には、例の（光源氏が）おはしまさぬ夜は、宵居（夜更かし）したまひて、人々（女房たち）に物語など読ませて聞きたまふ。（紫の上）「かく、世のたとひに（この世の一例として）言（い）ひ集めたる昔語（むかしがた）りどもにも、あだなる男、色好（いろこの）み、二心（ふたこころ）ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言（い）ひ集めたるにも、つひに寄（よ）る方（かた）ありてこそあめれ、（それに対し）て私（わたし）はあやしく浮（う）きても過（あ）ぐしつるありさまかな。……」など思（おも）ひ続けて、夜（よ）ふけて大殿籠（おほほのこも）りぬる暁方（あかつきがた）より、御胸をなやみたまふ。

〔若菜下巻四二二二〕

○紫の上の死（御法巻）

―紫の上は一時危篤に陥って以来、一命はとりとめたものの次第に衰弱していった。光源氏の愛情を身にしみてありがたく思うものの、出家への願いや女性の運命への嘆きを抱えたまま、光源氏と養女である明石の女御に看取られながら世を去った。